

第10分科会

「困り感のある子どもへの 人的アプローチ」

～子どもの興味の変遷を理解し、
伸ばす保育教諭のアプローチ～

助言者 今村 幸子

(鹿児島女子短期大学 児童教育学科 講師)

司会者 本田 雅代 (星幼稚園)

問題提起者 小野田あゆみ (しぶし幼稚園)

記録者 小池田花菜子 (南部幼稚園)

運営委員 三浦 昌平 (大崎幼稚園)

【研究課題】

子ども理解

【研究・研修の視点】

保育は子ども理解に始まると言っても過言ではない。子どもをしっかりと捉え正しく理解することは保育者に求められる資質・能力の基礎となるととても重要な分野である。そのためには、乳幼児期から大人へ成長発達の道筋を最新の理論から丁寧に学び直すことが大切である。また、各要領を加味しながらの子ども理解に加えて乳児の発達・育ちの理解も欠かさず、発達の全体像を俯瞰した上での保育実践であることが重要である。保育者には、子ども理解につながる記録や子どもの成長発達を可視化し、保育者同士で語り合い、多様な考え方を大切にしながら多面的に子どもの姿を捉えていく姿勢が重要である。そのことを保護者と共有し子どもの成長を共に喜び、考え合えるような機会を持つ。

多様性やインクルーシブが重視される社会の中で、特別な支援を必要とする子どもだけでなく、すべての子ども一人ひとりに応じた援助を行っていくことが大切である。これは幼児教育の本質であり、子ども理解を深めることで一人ひとりの違いを受け止め、等しく尊重され、教育・保育の公平性を担保していくことがますます重要になってきている。

このことを踏まえ、本園では療育手帳を持っていたり、何かしらの診断を受けていたりする子どもはいないものの、発達への課題から療育施設に通い、園における集団生活や活動、友達との関係などにやりにくさを持ち、いわゆる困り感を抱え支援を必要とする子どもは増加しているように感じられる。このことに着目し、困り感を持つ子どもへの保育教諭からの人的アプローチについて考えてみることにした。人的アプローチとなるとどうしても気になる所を克服することだけがクローズアップされがちであるが、別の角度から見て、変化しそうな所や素敵な所にも着目しながら、子どもの興味の変遷を理解し、職員間で情報共有して保育実践に取り組むことにした。

【研究・研修の手がかり】

- ① 困り感を持っているであろう子どもの詳細をまとめて共有することにより、子どもに対する理解をより深める。
- ② 実際に保育教諭が子どもに対して行ったアプローチを収集・検討することにより、その子どもに対する効果的なアプローチの法則性や共通点などを検討する。
- ③ 保育教諭間で検討したアプローチを子どもに行っていくことで、その子どもの困り感の軽減や一部解消を行うことを目指す。
- ④ 保育教諭側の課題点・改善点を確認することで、より効果的なアプローチを行うことを検討する。

【研究計画】

(令和6年度)

- ・ 困り感のある子どもの選定を行い、子どもの実態を把握するための観察を行う。

- ・ 子どもの困り感を理解、共有するための職員カンファレンスを行う。
- ・ カンファレンスで検討したことに留意し、子どもに保育を通してアプローチを行う。

(令和7年度)

- ・ 困り感のある子どもへの人的アプローチの保育実践と検証を行う。
- ・ 個別の発達理解と支援のあり方の学びを深め、保育実践し検証していく。

【発表の概要】

(1) 研究・研修テーマの捉え方

集団生活や活動、友達との関係性にやりにくさや困難さを持つ(困り感のある)子どもに対しての「支援」とは何かと考えた場合、できないことをできるようになることなど、気になることに対するアプローチばかりが先行しがちである。逆に得意なこと何なのか、好きなこと何なのか、今何に困っているのかなど、様々な視点から多角的に考えてみる大切であると思う。それに伴って当然「支援」も変わってくることを念頭に置き、本園では、通常行っている保育の一部から困り感のある子どもへの取り組みに焦点を当て、保育教諭の関わり方の保育実践を基に、記録に残し次の活動に生かしたいと思う。

(2) 研究の内容

- ・ 保育実践を振り返り、職員間でカンファレンスを行う。
- ・ カンファレンスと同時に3つのことに着目し、書き出しを行い、次への課題を考える。
- ・ 次の保育実践では、一人ひとりに応じた対応を更に心掛け、変化や現状を把握し記録する。
- ・ 園内研修を実施し、情報共有・共通理解や連携を図る。

(3) 研究の方法

- ・ 困り感を抱えているであろう子どもの選定、また根拠の整理
- ・ 保育教諭と困り感を抱えている子どもとの実践エピソードの抽出
- ・ エピソードから困り感の解消または軽減、成長を促したアプローチの検討
- ・ 保育教諭側の課題点の整理と次のアプローチに生かすための取り組みの検討

(4) 実践例

- ・ 対象児

事例1	N・Sくん	色水あそび
事例2	H・Kくん	段ボールあそび
事例3	N・Sくん	凧作り
事例4	H・Kくん	石掘り

以上の2名の対象児について事例の経過を記録。事例1・2後、職員間でのカンファレンスを通して、事例3・4を行う。事例前後には、職員間での情報共有・共通理解と連携を図り、子どもが変化したことへの気づきを次の活動に生かす。

(5) まとめ

- ・ 「子ども理解」は広範囲であるが一番大切なことである。誰一人全く同じ人間はいない。だからこそ一人ひとりの個性を様々な視点から理解・共有し、どの子どもにも様々な環境(自然・物的・人的など)を整えることの大切さを再認識できた。また保育教諭が子どもへ行う人的アプローチは良くも悪くも子どもに多大な影響を及ぼす。私たちは、常に子どもにとって何が最善かを見極めて、日々地道に保育を行っていくことの大切さを学んだ。

(6) 今後の課題

- ・ 困り感のある子どもが、安心して生活できる場に於いて、保育教諭が自分(困り感のある子ども)を見てくれていて、必要な時に「HELP」を発信できる存在であることが重要であるが、その「HELP」をいかにして子どもが発信できるか、保育教諭が気付いていけるかが課題である。

【討議の柱】

- ・ 困り感のある子どもへの保育者のアプローチの方法はどのように行っているか。
- ・ 困り感のある子どもへ園として保護者や公的機関へのアプローチはどのようにしているか。

【討議内容】 ※記録により抜粋

(問1) 困り感のある子どもへ、気を付けていることやアプローチはどうしているか。

- ・ 保育者は子どもの様子を主観で決めつけず、冷静に状況を把握し、環境や子どもの状態を的確に捉えた上で記録・相談を行う必要がある。
- ・ 困り感のある子がいる場合、1対1で話す時間を設けることで信頼関係が築かれ、子どもも安心して心情を話すことが出来る。
- ・ 困り感のある子どもには無理に行動を強要せず、子どもが「やりたい」と思えるきっかけを探し、得意分野からアプローチして主体性を引き出す支援が重要である。
- ・ 注意をする際は、名前を大声で呼ばない様にする。また、シールなどで「出来た」「頑張った」を可視化し、困る行動をただ止めるのではなく、時間を区切って許容する環境を整えるといった工夫をしている。
- ・ トランポリンや平均台などの遊具で体を動かし、気持ちを発散できる環境を整えている。
- ・ 職員間での情報共有が重要である。共有ノートやグループラインを用い、子どもへの対応の食い違いがないようにしている。
- ・ 掲示物の位置を調整し、環境を整えることで、集中出来る環境をつくる工夫をしている。また、活動前にイラストを用いて、見通しが持てるようにすることで、落ち着いて取り組めるようにしている。
- ・ 困り感のある子どもだけでなく、同じクラスの子どもにも配慮しながら丁寧な保育を行う姿勢が大切である。
- ・ 子どもにとって楽しいことを第一に考え、活動を工夫している園が多い。
- ・ 子どもの好みを理解することも重要である。

(問2) 困り感のある子どもへ、園として保護者や公的機関へのアプローチはどのようにしているか。

- ・ 学期や月ごとに保健師や特別支援の専門家が園に来園し、参観を行った上で、保護者・担任を含めた三者面談を実施している園がある。専門家が関わることで保護者が話しやすくなる。
- ・ 保護者対応を担う専任保育者を置き、担任が伝えにくいことをサポートする体制を整えている園もある。これにより、きめ細やかな支援が可能になる。
- ・ 電話連絡や担当者会議を密に行い、保護者・療育先・園が情報を共有する場を設けている園もある。訪問支援や保健師などの専門機関と連携し、担任が常に情報収集している。
- ・ 保護者が園で子どもの様子を子どもに見つからない様に観察できる機会を設ける園もある。
- ・ 大学や特別支援学校の専門家と、園独自のネットワークで相談している園もある。
- ・ 就学を見据えて、プラスになる点を強調し、保護者が安心して受け入れられるように説明をしている。
- ・ 相談員に来園してもらい、その情報を園内で共有する仕組みを持つ園もある。
- ・ 困り感を保護者に伝える際には、否定的にならないよう、日常での子どもの良い面を先に伝え、困り感については段階的に説明することが大切である。
- ・ 日常的に事実を伝えていることで、保護者が安心して相談できる関係を築けるようにしている。
- ・ 動画で普段の様子を共有する園もあり、出来ることだけでなく苦手な場面も含めて伝えている。
- ・ 担任だけでなく、園長や主任、特別支援教育担当など、様々な立場から保護者へアプローチすることが重要である。

【助言者のまとめ】

○助言者：今村 幸子先生（鹿児島女子短期大学 児童教育学科 講師）

■しぶし幼稚園の実践

支援とは、特別に区切られた場で行うものだけではない。日常の中で「この子はここが苦手だ」と感じた時に、手を差し伸べるような関わりも支援である。それはとても大切で素晴らしい支援であると考えている。

また、日常の活動の中で行われている支援を見つめ直し、その目的を明確にすることが必要である。「何を出来るようにするための支援なのか」「その効果はどうか」を職員間で検討し、共有することが大切である。自分たちが行っている支援を自覚し、その価値を認め合うことが、よりよい保育に繋がる。

■特別な支援とは

- ・ 苦手な部分に手を当てる（ウィークネスへの対応）
- ・ 得意な部分を活かしてできることを増やす（ストレングスへの対応）

特別支援教育というと、苦手を克服するというイメージが強いが、得意を活かした関わりも同じくらい大切である。特に得意な部分を伸ばす視点が重要である。

■特別支援と特別な場での支援

特別支援は特別な場だけで行うものではない。通常の場合、共に生きていくために必要なスキルを育てることが重視されている。それぞれの場でその子どもに対してカスタマイズした関わりを行うことが大切である。

■保護者にとって大切なこと

保護者にとって最も大切なのは、わが子が大切に扱われているという実感である。園での試行錯誤や小さな成長を丁寧に伝えることで、保護者は安心できる。そこから集中的なトレーニングや専門的支援の提案も受け入れやすくなる。

■支援の必要な子どもにとっての学び

共に生きること、助けを借りてよいこと、出来ないこともあるけれど活躍できる場があるということ学ぶ。

■周囲の子どもにとっての学び

助けてもらう姿を見て、自分も助けを求めてよいことを学ぶ。得意な時には周囲に提供すればよい。違うからこそ価値があることを知る。

■通常の場合における支援

- ・ 望ましい行動を増やす…褒めることが基本である。行動出来たらすぐに褒めることで、子どもは安心し、良い行動が繰り返される。
- ・ 困った行動を減らす…困った行動の裏側にある、望ましい行動を増やす視点が大切である。そのために、まずは観察と記録を行うことが重要である。

■「支援を受けること」と「共に生きること」

特別な場は、共に生きる場に戻るためのスキルを身につける場であるべきである。支援を行う大人は、共に生きるという共通の目標を見据え、どの子も活躍できる未来を描く必要がある。